

Title	トイツ語 es gibt 構文の特性: 事物の「所在」を記述しない存在表現
Author(s)	大喜, 祐太
Citation	言語科学論集 = Papers in linguistic science (2016), 22: 67-86
Issue Date	2016-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/219424">http://hdl.handle.net/2433/219424</a>
Right	© 2016 京都大学大学院 人間・環境学研究科 言語科学講座
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# ドイツ語 *es gibt* 構文の特性： 事物の「所在」を記述しない存在表現

大喜祐太

京都大学大学院／日本学術振興会

daigi.yuta.82c@kyoto-u.jp

キーワード：ドイツ語、存在表現、*es gibt* 構文、定性、実在的メタファー、直示性、否定性、語用論的推論

## 1. はじめに

本研究の目的は、存在表現の用法を語用論的観点から考察することによって、ドイツ語存在表現の特性を分析することである。本稿では、とりわけ、ドイツ語存在表現の中でも使用頻度の高い *es gibt* (*Eng. it gives*) 構文に焦点を当てる。*es gibt* 構文は、たとえば、*sein* (*Eng. be*) 動詞を用いた構文や他の存在表現と比較すると、存在の用法の一つと考えられている「所在」のための表現には使用されないことを主張する。そうした *es gibt* の特徴について、存在表現の用法に関する語用論的な考察を通じて議論したい。

本稿では、第2節で、Sweetser (1990) による英語の存在表現、*there is* 構文に関する議論を踏まえ、ドイツ語の存在表現 *es gibt* 構文が備える性質を概観する。第3節では、まず、主語の役割を果たす名詞句の定性について考察する。つづいて、より根本的に存在把握の仕方を理解するために、Lakoff and Johnson (1980) の「実在的メタファー」(ontological metaphor) の観点から存在表現を見ていく。その際、ドイツ語の存在表現の中でも、*es gibt* には、実在的メタファーが該当しないことを確認する。さらに、ドイツ語存在表現の名詞句や場所的副詞句の直示性を調べると、*es gibt* 構文を使用できる文脈には制限があることを議論する。第4節では、存在表現の意味解釈への「語用論的推論」(pragmatic inference) の貢献について考える。これらの分析の際、存在表現の用法の相違を念頭に置いて、別の存在動詞を用いた表現や他言語の存在表現と比較しながら、ドイツ語存在表現の特性を吟味する。

## 2. 「所在」を表現しない存在表現

本研究の中で、何らかの事物の存在について言及する存在表現に着目するのは、多くの言語が存在を言及するためにある特定の表現を備えており、日常的な言語使用の場では、その一つ

の表現に対して多様な用法を観察できるからである。

本研究で対象とする「存在表現」(existentials)とは、広義では、何らかの事物の存在を示す言語表現のことであり、以下のような表現を指す<sup>1</sup>。

(1) *There are biscuits on the sideboard.* (Sweetser 1990:119)

(1)は「サイドボードにビスケットがある」というビスケットの所在を示す表現である<sup>2</sup>。存在表現には、このような所在表現とは異なる用法もある。たとえば、Sweetser (1990)は、つぎの用例を挙げている。

(2) *There are biscuits on the sideboard if you want them.* (Sweetser 1990:119)

この表現は「もし欲しかったら、サイドボードにビスケットがある」、つまり「あなたが欲しいのならば、サイドボードに置いてあるビスケットをあなたに提供する」(*Eng. I hereby offer you some biscuits on the sideboard, if you want them*)ということの意味しており、それゆえ「サイドボードにビスケットがある」という事実以上のこと、すなわち、この場合は聞き手へのビスケットの提供をほのめかしている。

ドイツ語にも、英語の *there is* 構文「～がいる、ある」のように、非人称存在表現があり、最もよく用いられるのが、動詞 *geben* を用いた *es gibt* 構文と呼ばれるものである。

(3) *Es gibt einen Weihnachtsmann.*

it give.3SG INDEF.ACC Santa-Claus

‘There is a Santa Claus.’

(3)は「サンタクロースは存在する」という実在を示す表現である。(3)のような *es gibt* を用いた実在文にとって問題となるのは、存在物がどこか特定の場所に位置しているということではなく、実際に存在しているかどうかということである。この特徴によって、*es gibt* 構文はドイツ語の典型的な存在表現であるとみなされている。ところが、英語や日本語の表現から推測して、あらゆる状況で、何らかの存在について *es gibt* 構文を使用してしまうと非文になる場合がある。

(4) ? *Auf dem Tisch gibt es ein Buch.*

on DEF.DAT table give.3SG it INDEF.ACC book

‘There is a book on the table.’

たとえば、(4)の表現は、形式的な観点から言えば正しいように見えるにもかかわらず、たいていの母語話者は(4)を容認しない。言い換えれば、統語的規則以外の何らかの要因によって、(4)は非文となってしまうのである。

こうした事実を踏まえ、本稿では、*es gibt* 構文は、「机の上に本がある」(Eng. *There is a book on the table*)のように、記述的な存在表現としては使用できないと判断する。

### 3. 存在表現の意味を決定する要因

存在表現の意味や容認度の決定には、複数の要因が絡み合っている。本節では、定性と新情報、実在的メタファー、直示性、否定性などのトピックを挙げ、別の存在動詞（たとえば、*sein* 動詞など）を用いた表現や他言語の存在表現と比較することによって、*es gibt* 構文の使用文脈を詳しく見ていきたい。

#### 3.1 定性と新情報

英語の *there is* 構文の研究は数多く存在するが、古典的なものとして、Milsark (1977) が挙げられる。その中で「*there is* 構文は、動詞の後に定名詞句が置かれることを容認しない」というテーゼがある。

(5) *Have you seen the dog or the cat around?*

- a. *Not lately. \*There's the dog running loose somewhere in the neighborhood.*
- b. *Not lately. The dog is running loose somewhere in the neighborhood.*

より詳しく言えば、Ward and Birner (1995: 722) が提示した (5) の用例のように、*there is* 構文は、定名詞句、すなわち、「定性」(definiteness) を持つ名詞句、たとえば、定冠詞、指示詞、所有形を伴う名詞句、代名詞、固有名詞などが動詞の後にくることを避ける。こうした制約は、「定性制約」(definiteness restriction) もしくは、「定性効果」(definiteness effect) と呼ばれている。

ただし、Ward and Birner (1995) などの先行研究でもすでに指摘されているように、とりわけ日常的な言語使用では、*there is* 構文と定名詞句が共起することがある。たとえば、以下の用例のように、*there is* が定冠詞や固有名詞を取る場合も多い。

(6) *I guess we've called everybody.*

*No, there's still Mary and John.* (Ward and Birner 1995: 725)

(7) a. *I'm glad there is you.*

- b. *Schön, dass es dich gibt.*  
nice that it you.ACC give.3SG

(6) は、Ward and Birner (1995) が Abbott (1993) から引用した用例であり、Mary や John のような固有名詞を取っている。(7a) は歌のタイトルなどでよく用いられるものであり、やや慣用的な表現であるとはいえ、人称代名詞を容認する。ドイツ語でも、(7b) のように、ほぼ同様の内容を *es gibt* 構文を用いて言い換えることができる。

(8) Bond: *Do we still have a gun room?*

Kincade: *Ah. They sold the lot to a collector from Idaho or some such place. They were shipped out weeks ago. There's just... your father's old hunting rifle. We couldn't let that go.* (“Skyfall”)

(8) は、James Bond (007 Skyfall) の映画のワンシーンで、主人公である James Bond は敵を迎え撃つために、何十年も帰っていなかった生まれた家に戻る。執事であった Kincade は Bond が死んでしまってもう帰ってこないと思ひ込み、Bond や Bond の父親の遺品を売り払ってしまう。(8) はそのような状況での二人の会話であり、Bond の「父親の古いハンティングライフル」は、話し手の Kincade にとっては当然既知の情報であるのに対して、Bond にとっては新しい情報である。

こうした言語現象の説明のために、Ward and Birner (1995: 740) が導出した結論は、*there is* 構文における動詞の後に置かれる名詞句は、聞き手にとっての新情報 (hearer-new) でなければならぬということである。つまり、*there is* 構文にとって、動詞の後に定名詞句が置かれることを容認しないということは、その付帯的な制約に過ぎないのである。

ドイツ語でも、コーパスなどで調べてみると、*es gibt* の対格目的語 (意味上の主語) に新情報が現れる場合がほとんどであるとはいえ、旧情報の定名詞句も容認する。この点については、西脇 (2012) などの先行研究でも詳述されている。

(9) *Das gibt's nur einmal.*

that give.3sg.it only once

‘It only happens once.’ (“Der Kongress tanzt”)

(9) の用例は、ウィーン会議を舞台にした、ドイツのミュージカル映画の『会議は踊る』の劇中歌からの用例で、主人公の女性が「(ロシア皇帝に見初められるなんていうことは一生に) ただ一度だけしかない」という内容を表現している。この用例中の ‘das’ は、定の代名詞であり、文脈上既知の情報を指すもの (discourse deixis) であると考えられる。

- (10) *Es gibt ein Buch von ihm mit dem Titel Monadologie. Das gibt es  
 it give.3SG INDEF.ACC book of him with DEF.DAT titel Monadology DEM.ACC give.3SG it  
 sehr günstig als zweisprachige Ausgabe bei Reclam.  
 very reasonable as bilingual version by Reclam*  
 ‘There is a book of him with the title Monadology. You can buy it very reasonable in two  
 languages by Reclam.’

(10) の用例が表現するのは『単子論』というタイトルを持つ彼の本がある。その本は、レ  
 クラム文庫からバイリンガル版がとても安く出版されている」という内容である。二つ目の *es  
 gibt* の用例の *das* は、‘ein Buch (...) Monadologie’ を指し、前方照応的な使用であると判断で  
 きる。

おそらく、どちらの用例も、英語では、*there is* 構文の使用が許容できないか、あまり好ま  
 れない。(9) であれば、“it only happens once” として訳出し、(10) であれば、“this is...” と  
 なるのが普通であると考えられる。なぜなら、*there is* の場合は、定であっても新情報の名詞句  
 しか取ることができないからである。それに対して、*es gibt* 構文内の対格目的語は必ずしも新  
 情報である必要はなく、文脈指示詞や前方照応詞が出現する場合がある。

### 3.2 実在的メタファー

ここまでの考察で、英語とドイツ語の存在構文が許容する名詞句の定性の範囲は異なってい  
 ることがわかったが、さらに、認知的な観点から見ても両者には決定的な違いがある。英語と  
 ドイツ語の非人称構文では、存在把握の仕方にも本質的な相違があり、特にメタファーについ  
 て異なっている。

#### 3.2.1 具体的存在物から抽象的存在物へ

Lakoff and Johnson (1980) が主張するのは、わたしたちが概念的に空間内の存在を理解する  
 とき、その理解は、実在的メタファー (ontological metaphor) を通じて行われるということ  
 である<sup>3</sup>。Lakoff and Johnson (1980: 25) によれば、「わたしたちの諸々の経験を対象や実体とし  
 て理解することによって、わたしたちは経験のいくつかの部分を選び出し、それらを同種の離  
 散的基体や実体とみなしており」それゆえ「実在的メタファーとは、すなわち、できごと、活  
 動、感情、考えなどを基体や実体として見ること」である。さらに、Lakoff (1987: 543) に従え  
 ば「存在は、概念空間内の場所として理解される」と考えられる。より簡潔に言うと、人間の  
 認知過程において、具体的存在物から抽象的存在物へのメタファーがあるということである。

Lakoff and Johnson (1980: 30) が挙げている存在表現の例は、(11) のような例である。

(11) *There's nothing in sight.* (Lakoff and Johnson 1980: 30)

(11) では「視界は容器である」というメタファーが成立している。日本語でも、たとえば、具体的に所在を示す (12) のような用例だけでなく、(13) のようにメタファーとして存在を表現することができる<sup>4</sup>。

(12) 越後には強大な上杉謙信がいる。(利家とまつ)

(13) 彼らの背後には薩摩がいる。(新選組藤堂平助)

所在文である (12) に対して、(13) は、実際に薩摩という物理的実体が背後にいるわけではなく、薩摩という強大な存在が後ろ盾となっているということを意味し、こうした用例での「いる」は、多義的に使われている。

このように、(12) の所在文と (13) の実在文との間には、その表現の中で、存在物が現実世界の中に同定されるのか、もしくは思考空間の中に概念的な存在物として同定されるのかという区別がある。たとえば、Lakoff (1987: 543) で挙げられているのは、以下のように、「庭」という現実世界にうさぎを同定する所在文 (14) と、「夢」という概念的な空間の中にうさぎを同定する実在文 (15) の用例である。

(14) *In the yard there is a rabbit.*

(15) *In my dream there was a rabbit.*

Bolinger (1977) によれば、(14) のような空間的所在表現 (spatial locatives) は「文字通り、または比喩的な意味でも、事物をわたしたちの目の前にもたらず」のに対して、(15) のような存在的な *there* は「事物をわたしたちの心の中に提示する」働きを備えている。

このように、英語の存在動詞や構文には、一つの形式に対して複数の意味を付与することができる。つまり、Sweetser (1990) も論じているように、この場合、動詞や構文の持つ多義性 (polysemy) がその動詞や構文を含む表現の意味解釈のために重要な役割を果たしていると言える。

### 3.2.2 ドイツ語における実在的メタファー

ドイツ語でも、たとえば、sein 動詞、stehen, liegen などの動詞では、(16) から (17) のように、同じ動詞 stehen を使っていたとしても、具体的事物から抽象的事物への実在的メタファーが成立しており、(16) と (17) の stehen の用法には違いがあると考えられる。

(16) *Das Auto steht in der Garage.*  
 DEF.NOM car stand.3SG in DEF.DAT garage  
 ‘The car is in the garage.’

(17) *Die Sache steht nicht gut.*  
 DEF.NOM thing stand.3SG not good  
 ‘The situation is not good.’

(16) の「車」は、現実世界の中の「ガレージ」に同定されているのに対して、(17) の「状況」は、現実空間の中の物理的存在物とは考えられない。

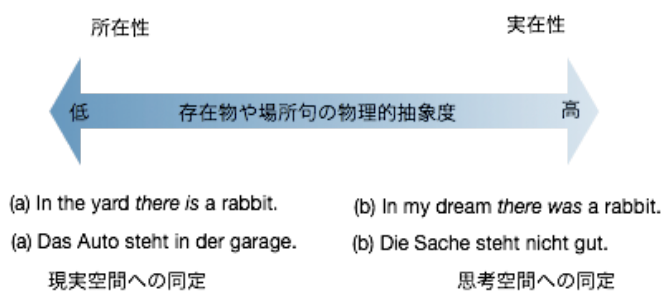


図1 具体物から抽象物への実在的メタファー (cf. Lakoff 1987: 543)

図1の通り、ある言語表現内の存在物（実主語）や場所句の物理的抽象度が高くなるほど、その言語表現の実在解釈は増すことになる。(14) から (17) の用例のように、英語の *there is* やドイツ語の *stehen* では、現実空間から思考空間まで幅広く存在物の同定が可能である<sup>5</sup>。

### 3.2.3 現実世界の具体的存在物を表現できない *es gibt*

前節でも述べたように、*es gibt* を用いた (18) の表現 (= 4) は、形式的には正しいように見えたとしても、たいていの母語話者は (18) を容認しない。



- (18) ? *Auf dem Tisch gibt es ein Buch.*  
 on DEF.DAT table give.3SG it INDEF.ACC book  
 ‘There is a book on the table.’

*es gibt* 構文に用いられる動詞 *geben* は、そもそも対格名詞句に対応する事物の移動の意味を持ち、主格の *es* と共起するときのみ存在表現の機能を担う。その *es gibt* 構文と所在を表現する他の存在動詞との明らかな違いは、*es gibt* が現実世界の中の具体的な事物の所在を表現できないということである。そのため、*es gibt* 構文に対しては、具体的存在物から抽象的存在物への実在的メタファーを通じた存在把握の仕方を想定することができないのである。

### 3.3 直示性

Glück (2010: 132) によると、「直示」(Deixis) とは、*ich* (Eng. I), *du* (Eng. you) や *hier* (Eng. here), *da* (Eng. there), *jetzt* (Eng. now) などの表現を用いて、ある表現が発話される状況に関連して決定されるような言語使用のことを指す。たとえば、‘*wir sind da*’ ‘わたしたちはそこにいる」という発話の ‘*wir*’ (Eng. we) や ‘*da*’ (Eng. there) は、発話状況に応じて変わる。

#### 3.3.1 英語とフランス語における存在表現の直示的使用

存在表現の直示性について議論している Lakoff (1987: 468) は、以下のように、*there is* 構文を「存在的使用」(existential use) と「直示的使用」(deictic use) に分類する。

- (19) *There was a man shot last night.* (= existential use)  
 (20) *There’s Harry with his red hat on.* (= deictic use)

英語では、*there is* を両方の目的のために使うことができる。(19) の用例が思考空間内の存在についての言及であるのに対して、(20) は、話し手と聞き手の眼前の「赤い帽子を被ったハリー」についての記述であると解釈できる。

フランス語の存在表現研究である東郷 (2009: 4–5) では、英語と同様に、フランス語でも、非人称存在表現である *il y a* (Eng. it there has) 構文が (21) の所在文、(22) の眼前描写的所在文に使用されることを指摘している。つまり、*il y a* 構文では、存在表現の直示的使用が許容されるのである<sup>6</sup>。

- (21) *Il y a des élèves dans la cour.*  
 it there have.3SG INDEF.ACC students in the court  
 ‘There are students in the court.’ (= locative-existential use) (東郷 2012: 54)

- (22) *Regarde! Il y a une voiture de police devant ta maison.*  
 look it there have.3SG INDEF.ACC car of.DEF police in-front-of your house  
 ‘Look! There is a police car in front of your house.’ (= deictic use) (東郷 2009: 31)

### 3.3.2 ドイツ語存在表現の直示的使用

他方、ドイツ語の直示的表現では、眼前描写的に使用されているフランス語の (22) のような用例に対しては、sein 動詞を用いるのが普通で、*es gibt* は許容されないか、もしくは、*stehen* や *da ist* によって代用される。

- (23) a. *Schau mal! Vor deinem Haus steht/ist ein Polizeiwagen.*  
 look in-front-of your.ACC house stand/be.3SG INDEF.NOM police-car  
 b. *Schau mal! Da ist ein Polizeiwagen vor deinem Haus.*  
 look there be.3SG INDEF.NOM police-car in-front-of your.DAT house  
 c. *Schau mal! \*Es gibt einen Polizeiwagen vor deinem Haus.*  
 look it give.3SG INDEF.ACC police-car in-front-of your.DAT house  
 ‘Look! There is a police car in front of your house.’

Pfenninger (2009: 320) でも指摘されているが、直示的使用の英語の *there is* に対応する表現は、*there* と *da* の両者が本来非指示的 (虚辞的: expletive) かつ場所句としての機能を保存しているという点からも、(23b) のような *da-sein* 構文であるか、もしくは、*stehen*, *liegen* などの所在動詞を用いた表現であると考えられる。

このような点から、ドイツ語の *es gibt* は、英語の *there is* やフランス語の *il y a* とは、直示的使用を許容できないという点で区別される。また、ドイツ南部やドイツ語圏スイスなどのアレマン方言の分布する地域では、こうした眼前描写的表現に対して、(24) のような *haben* (*Eng. have*) を用いた非人称構文 *es hat* (*es hät*) が用いられることも多い<sup>7</sup>。

- (24) *Schau mal! Es hät äs Polizeiauto vor dim Huus.*  
 look it have.3SG INDEF.ACC police-car in-front-of your.DAT house  
 ‘Look! There is a police car in front of your house.’

### 3.3.3 *es gibt* と共起する空間直示詞

*es gibt* は、眼前描写的な表現を許容できないけれども、(25) から (28) のように、*hier/da/dort* などの空間直示詞 (*Raumdeixis*) としばしば共起することがある。

- (25) *Bargeld gibt es hier!*  
 cash give.3SG it here  
 ‘There is cash here!’ (Daigi 2015)
- (26) a. *Hier gibt es frische Backwaren mit echtem Mehrwert!*  
 here give.3SG it fresh pastries.ACC with real added-value  
 ‘There are fresh pastries with real added value.’ (Daigi 2015)
- b. *Hier sind frische Backwaren mit echtem Mehrwert!*  
 here be.3PL fresh pastries.NOM with real added-value  
 ‘There are fresh pastries with real added value.’
- (27) *Hannover ist schön, und hier gibt es meinen Wunschstudiengang.*  
 Hannover be.3SG beautiful and here give.3SG it my.ACC ideal-study-program  
 ‘Hannover is beautiful, and there is my ideal study program here.’ (HAZ)
- (28) *Ich bin regelmäßig bei Eishockeyspielen anwesend, und dort gibt es ja auch den Videobeweis.*  
 I be.1SG regularly at ice-hockey-games present and there give.3SG it yes also  
 DEF.ACC video-judge  
 ‘I am regularly present at ice hockey games, and there is the video judge too.’ (BRZ)

Ehrich (1985: 134) は、これらの空間直示詞について、発話の場 (Sprechort)、関連空間 (Bezugsraum)、指示空間 (Verweisraum) の区別の観点から説明する。発話の場は、話し手の現在位置 (Sprecherstandort) と同義である。関連空間は、話し手に関連する領域 (視覚など) によって、すなわち話し手と聞き手の行為が及ぶ知覚領域によって決定される。指示空間は、直示的表現が指示する空間である。

さらに、指示性の区別について、Diessel (1999) によれば、直示を含めた「指示」(reference) には、大別すると、外部照応的使用 (exophoric use)、前方照応的使用 (anaphoric use)、文脈指示的使用 (discourse deictic use) がある。

(25), (26a), (27) の空間直示詞 ‘hier’ は、Diessel (1999) の言うところの外部照応として使用されているのではなく、(25) と (26a) では、文脈指示的使用、つまり文脈上の同一空間 (Bezugsraum) の指示とみなすことができる。これらの表現は、関連空間が発話の場を含み、その発話の場が「現金」や「新鮮なパン」を包含していると考えられる。(25) では、発話の場に、「現金」があるということであり、(26a) では、「新鮮なパン」があるということである。つまり、この場合の ‘hier’ は所在的に指示空間を規定するような直示的表現ではないということである。

ある。とりわけ、(27)の‘hier’は、前方照応的に使用されていて、その表現によって話し手の場所がハノーファーにあることがわかる。

(26a)と(26b)については、両表現が与えるニュアンスには決定的な違いがある。すなわち、*es gibt*を用いた(26a)では、あるパン屋が新鮮なパンを提供していることを表現しているのに対して、*sein*動詞が使われた(26b)は、むしろ新鮮なパンが目の前にあることの単純な記述的表現となっており、(26b)の‘hier’は、話し手の身振りなどが伴えば、外部照応的使用と理解して差し支えないだろう。

(27)と同じく(28)の*dort*は、視覚領域の及ぶ明確な場所を指示しているのではなく、「アイスホッケーの試合で」という文脈指示的な使用となっているために、*es gibt*との共起を許容すると考えられる。

- (29) \**Auf dem Berg gibt es viel Schnee.*  
 on DEF.DAT mountain give.3SG it many snow  
 ‘There are many snow on the mountain.’

とはいえ、冒頭の(4)の用例でも確認したように、*es gibt*は、たとえば、(29)のように、目の前にある雪山の写真を見ながら雪が山を覆っていることを記述するような場面でも用いられることはない。したがって、*es gibt*を使用できるのは、事物の眼前描写ではなく、前方照応か文脈指示の場合に限られる。

### 3.4 否定

*es gibt*構文のもう一つの特徴として、否定性(negativity)と親和性が高いことが挙げられる。たとえば、(30)や(31)のように、*kein* (*Eng.* no), *nicht* (*Eng.* not), *nichts* (*Eng.* nothing)といった否定辞と共起する用例が多い。

- (30) *Es gibt keine Definition von Dada.*  
 it give.3SG no definition of Dada  
 ‘There is no definition of Dada.’ (HMP)

- (31) *Es gibt nichts zu sagen.*  
 it give.3SG nothing to say.INF  
 ‘There is nothing to say.’

Lakoff (1987: 540–546)の主張では、否定表現は、存在表現の存在的使用では出現するのに対して、直示的使用では現れることはない。なぜなら、目の前に存在しないものについて直示

的に言及する言語表現は成立しえないからである。Sweetser (1990: 11) も、否定性は、現実世界から認識世界への典型的な推論であると述べている。それゆえ、*es gibt* 構文と否定辞が共に用いられる頻度が高いということは、*es gibt* 構文が記述的存在表現として使用されないことを示唆しているとも言える。

#### 4. 語用論的観点から見た存在表現

前節では、定性と新情報、実在的メタファー、直示性、否定性などの要因が *es gibt* 構文をはじめとして、ドイツ語存在表現の意味決定に影響を与えていることを議論した。本節では、存在表現の意味解釈に対して、いかに語用論的推論が関わっているのかを考察する。特に、実主語や副詞句の定性や直示性を論じる際には、前後の文脈やコンテキスト情報などの語用論的情報の把握が必要不可欠である。

##### 4.1 存在表現の意味への語用論的推論の貢献

先に議論した直示的な要素は、視覚的刺激というコンテキスト情報に含めることができ、語用論的情報として扱うことが可能である。Sperber and Wilson (1995: 50–71) では、「直示推論的コミュニケーション」(ostensive-inferential communication) と「非直示推論的コミュニケーション」(non-demonstrative inferential communication) を区別する。Sperber and Wilson (1995: 63) によれば、直示推論的コミュニケーションとは、話し手と聞き手にとって明白な刺激によって、話し手の発話の意味を明らかにするコミュニケーションである。たとえば、(22) や (23) の例では、その刺激は、話し手と聞き手の目に映るパトカーへの話し手の「指差し」に当たる<sup>8</sup>。それに対して、非直示的推論コミュニケーションとは、そうした指差しや身振りなどの言語外的な刺激を通じた推論を使用しないコミュニケーションのことを指す。

*da-sein* 構文やスイスドイツ語の *es hat* 構文が実現するのは、主に外部照応的な使用を通じた直示推論的コミュニケーションであり、他方、*es gibt* 構文は、もっぱら非直示推論的コミュニケーションでしか出現せず、直示的指示詞と共起したとしても、前方照応的使用か文脈指示的使用に制限される<sup>9</sup>。そのため、*da-sein* や *es hat* は、記述的 (descriptive) 表現として出現することが多い。たとえば、用例 (32) の「ヘビ」(eine Schlange) は、外部照応的に使用された名詞句であり、この *da-sein* 構文は、眼前の状況を記述する表現であると言える。

(32) *O Gott!, schrie sie. Da ist eine Schlange!*

Oh God shout.PST she there be.3SG INDEF.NOM snake

‘Oh God!, she shouted. There is a snake!’ (HAZ)

それに対して、*es gibt* は、認識的 (epistemic) 表現でのみ使用されることになる。先に示した (33) (= 28) のように、*dort* のような空間直示詞を含んでいたとしても、対格名詞句（ここでは「ビデオ判定」）が現実空間内へ同定されているわけではない。

(33) *Ich bin regelmäßig bei Eishockeyspielen anwesend, und dort gibt es ja auch*  
 I be.1SG regularly at ice-hockey-games present and there give.3SG it yes also  
*den Videobeweis.*

DEF.ACC video-judge

‘I am regularly present at ice hockey games, and there is the video judge too.’ (= 28)

こうした推論過程の根本的な相違を踏まえ、指示性と直示性に基づく存在物および場所句の物理的抽象度と明示性の度合い (degree of explicitness) を考慮し、各存在構文・存在動詞を比較すると、図2のようにまとめることができる<sup>10</sup>。

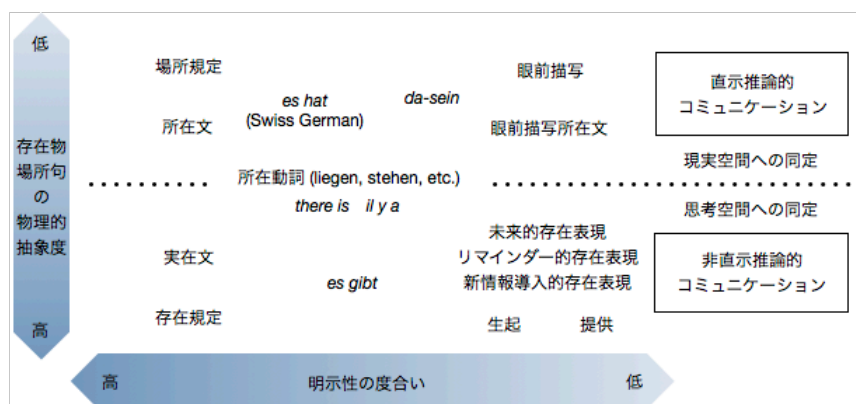


図2 存在物および場所句の物理的抽象度と明示性の度合いに基づく存在構文の比較

図2の存在表現の分類について、存在文は現実空間、存在文は思考空間自体、新情報導入的存在表現は思考内の談話空間への事物の同定の機能をそれぞれ担っている。発話の意味解釈のために語用論的推論の貢献が小さい存在表現は、コンテキストの想定からある程度独立して意味の復号化 (decoding) が可能となる表現である。言い換えれば、表意の明示性の高い存在表

現である<sup>11</sup>。Sperber and Wilson (1995: 182) で主張されているのは「復号化の相対的な貢献が大きくなればなるほど、また語用論的推論の相対的な貢献が小さくなればなるほど、表意の明示性は増す」ということである。つまり、その表現の明示性の度合いは高くなる。したがって、表意の明示性が高く、意味論的に解釈できる存在表現については、コンテキストに依存せず、その意味を決定できる可能性が相対的に高い。たとえば、(16) のような *stehen* を用いた所在文は、語用論的推論の貢献が小さいということである。

#### 4.2 *es gibt* 構文の特性

ドイツ語の *sein* 動詞や英語の *there is* が実在的メタファーを通じて存在表現の多様な用法を許容するのに対して、*es gibt* の使用は、非直示推論的コミュニケーションに限られる。*es gibt* 構文は、記述的存在表現として使用されることはなく、それゆえ、所在文や眼前描写的所在文として扱われることもない。なぜなら、*es gibt* 構文に対しては、話し手と聞き手の思考から独立して意味解釈が行われることが困難だからである。Brinkmann (1971: 450) が主張するように、動詞 *geben* の使用の際には、本性上、たとえ非人称の表現であっても、人間との関係が想定されているのである。

- (34) *Wo gibt es Tickets? -Hier gibt es Tickets. Wir bieten Ihnen in unserem  
where give.3SG it tickets here give.3SG it tickets we offer.1PL you.DAT in our.DAT  
Bediengebiet eine Vielzahl von Ticketverkaufsstellen an. Für den schnellen  
service-area INDEF.ACC variety of ticket-vending-machines for DEF.ACC quick  
Fahrscheinwerber finden Sie an 145 Haltestellen Ticketautomaten.  
ticket-purchase find.2SG you at 145 stops ticket-corners  
'Where are tickets? Tickets are here. We offer you a wide range of tickets in our service  
area. To purchase a ticket quickly, You will find ticket vending machines at 145 stops.'*  
(DVB)

(34) は、ドレスデン交通局のサイトの乗車券購入案内のページで、*es gibt* 構文が出現する用例である。一見したところ、*es gibt* の用例はチケットの「所在」を表現しているように見えるが、それにつづく内容から判断できるのは、「どこでチケットを入手できるか」ということ、つまり「提供」の場所を問うのが本来の意図であるということである。

- (35) a. *Hier gibt es frische Backwaren mit echtem Mehrwert!*  
 here give.3SG it fresh pastries.ACC with real added-value  
 ‘There are fresh pastries with real added value.’ (= 26a)
- b. *Hier sind frische Backwaren mit echtem Mehrwert!*  
 here be.3PL fresh pastries.NOM with real added-value  
 ‘There are fresh pastries with real added value.’ (= 26b)
- (36) *Es gibt einige positive Beispiele.*  
 it give.3SG some positive examples  
 ‘There are some positive examples.’ (BRZ)

簡潔に言えば、話し手が *es gibt* を用いるのは、sein 動詞によって表現される (35b) のように、事物の所在を記述するためではなく、むしろ、その表現から「提供」を意図したり (35a)、のちにつづく談話の糸口となる「新情報」を導入するためである (36)。

## 5. まとめと今後の展望

本稿では、ドイツ語存在表現、とりわけ *es gibt* 構文の特性について論じた。*es gibt* 構文が他の表現と際立って異なっているのは、ある事物の存在を端的に記述するような表現、つまり所在表現としては使用されないということである。言い換えれば、*es gibt* 構文によって表現されるのは、事物の「存在」に加えて、何らかの別の意図である。そうした意図は、(34) や (35a) で示した「提供」や (36) のように談話への「新情報の導入」であったりする。

本研究では、存在表現の意味規定の要因に、定性、新情報、実在的メタファー、直示性、否定性に加えて、語用論的推論の貢献などを挙げたが、今後の研究では、コーパス調査によるさらなる用例収集を通じて、図2の分類が実際の存在表現の日常的使用にどれほど妥当するのかを再検討し、この存在表現の分類に修正を加えていきたい。



## 付記

本稿は、JSPS 科研費（特別研究員奨励費 研究課題番号：16J09181）の助成を受けたものである。

## 注

<sup>1</sup> 存在についての言語表現には、「存在文」(existential sentences)や「存在構文」(existential constructions)という呼称もよく用いられるが、ここでは、より広い意味で当の表現に言及する場合には「存在表現」を、*es gibt* や *there is* といった慣用的な各構文に焦点を絞る場合には「存在構文」という用語を使う。

<sup>2</sup> 本稿での用例に関して、先行文献から引用したものについては文献を示し、コーパスから抽出したものについては出典を略記している。用例に注記のないものは、母語話者との議論から作例したものである。

<sup>3</sup> ‘ontological metaphor’ という用語に対して、たとえば、谷口 (2003: 26) では、「存在のメタファー」という用語を当てている。本研究では、‘existential’ には、「所在」なども含めたより広い範囲の存在様態を示すために、「存在の」という語を、‘ontological’ には「実在の、実在的」という語を用いる。

<sup>4</sup> (12) と (13) の用例は、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言から抽出した。

<sup>5</sup> 例外的に、存在物や場所句の物理的抽象度が高い場合でも、“*sie steht seit 30 Jahren auf der Bühne*”「彼女は三十年間舞台上に立っている」のような用例では、存在物の現実空間への同定というよりも、表現全体に空間化メタファーが関わっていると考えられる。

<sup>6</sup> フランス語では、津田 (2013) でも指摘されているように、眼前描写文に対しては、文脈によって、*il y a* よりも *voilà* の方がより好まれる場合がある。

<sup>7</sup> Daigi (2014) によれば、*es gibt* と *es hat* はともに存在表現に分類でき、統語的にはきわめて類似した構文であるが、両者の用法は完全に同一であるわけではない。

<sup>8</sup> Sperber and Wilson (1995) の関連性理論では、言語的もしくは非言語的コミュニケーションを統一的に説明するための根本的な原理として「関連性」を使用している。本研究では、直示的な要素が聞き手の推論を可能にする関連性を大きくする情報の一つとなると考えられる。

<sup>9</sup> Lakoff (1987: 541) は、存在の *there* 構文が直示の *there* 構文に基づいていると主張する。ドイツ語でも、そうした実在的メタファーを複数の存在動詞に関して想定できるものの、*es*

*gibt* にそのような性質は認められない。

<sup>10</sup> Sweetser (1990: 96) は、英語の “there’s always ...” のように、聞き手に何かを思い出させる「慣習的な提案の力」(conventional suggestion force) を持つ表現を「リマインダー表現」とし、本研究では、特にそうした特徴を備える存在表現を「リマインダー的存在表現」と呼ぶ。

<sup>11</sup> Wilson and Sperber (2012: 12) では「表意 (explicature) は、復号化と推論の組み合わせから復元される」と考える。また、表意は、一般的に、明示的内容、言われたもの、発話の文字通りの意味と呼ばれるものとほぼ同義である (Wilson and Sperber 2012: 13)。

### 略号一覧

ACC	accusative	BRZ	Braunschweiger Zeitung
DAT	dative	DRB	Dresdner Verkehrsbetriebe AG
DEF	definite	HAZ	Hannoversche Allgemeine
INDEF	indefinite	HMP	Hamburger Morgenpost
INF	infinitive		
NOM	nominative		
PL	plural		
PST	past		
SG	singular		
1	1st person		
2	2nd person		
3	3rd person		
Eng.	English		

### 参考文献

- Bolinger, Dwight Le Merton. 1977. *Meaning and Form*. London, New York: Longman Publishing Group.
- Brinkmann, Hennig. 1971. *Die deutsche Sprache: Gestalt und Leistung (2. neubearbeitete und erweiterte Auflage)*. Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Daigi, Yuta. 2014. Untersuchung der Existenzkonstruktionen *es hat* und *es gibt* im Schweizerhochdeutschen. *Sprachwissenschaft Kyoto* Vol.13: 39–56.

- Daigi, Yuta. 2015. Existenzkonstruktion als Sprechakt: Akzeptabilität der *es gibt*-Konstruktion. *Germanistik Kyoto* Vol.16: 79–96.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: Form, Function and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Ehrich, Veronika. 1985. Zur Linguistik und Psycholinguistik der sekundären Raumdeixis. In Schweizer, Harro (ed.) *Sprache und Raum: Psychologische und Linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit* 130–161. Stuttgart, Metzler: J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung.
- Glück, Helmut. 2010. *Metzler Lexikon Sprache (4. aktualisierte und überarbeitete Auflage)*. Stuttgart, Weimar: J.B. Metzler.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 西脇麻衣子. 2012. 「存在文と(不)定性表現 —es gibt 構文の文法化を手がかりに—」『エネルギー』 37: 33–47.
- Milsark, Gary L. 1977. Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English. *Linguistic Analysis* Vol.3: 1–29.
- Pfenninger, Simone E. 2009. *Grammaticalization paths of English and High German existential constructions: A corpus-based study*. Bern, Berlin: Peter Lang.
- Sperber, Dan, and Deirdre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and cognition. Second Edition*. Oxford, Cambridge: Blackwell Publishers.
- Sweetser, Eve. 1990. *From etymology to pragmatics: The mind-body metaphor in semantic structure and semantic change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』東京: 研究社.
- 東郷雄二. 2012. 「存在文と不定名詞句の意味解釈」茂坂原 (編) 『フランス語学の最前線 1【特集】名詞句意味論』 53–77. 東京: ひつじ書房.
- 津田洋子. 2013. 「IL YA 構文と VOILA 構文の談話機能—指示対象の情報特性とアスペクトの分析を中心に—」『フランス語学研究』 47: 17–32.
- Ward, Gregory, and Betty Birner. 1995. Definiteness and the English existential. *Language* Vol.37: 722–742.

Wilson, Deirdre, and Dan Sperber. 2012. *Meaning and relevance*. Cambridge: Cambridge University Press.

東郷雄二. 2009. 「フランス語の存在文と探索領域—意味解釈の文脈依存性と談話モデル— 会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究」, 文部科学省科学研究費報告書.

# **The Characteristics of the German *es gibt*-Construction**

## **– Existential That is not Accessible to “Location” –**

Yuta Daigi

This study aims to analyze the characteristics of German existential constructions through the discussion on the uses of existentials in German and English from a pragmatic perspective. I focus specifically on the impersonal *es gibt*-construction, which is used quite frequently in Modern German. In contrast with other German existential verbs such as *sein* (Eng. be), *stehen* (Eng. stand), and *liegen* (Eng. lie), the *es gibt*-construction cannot be used as locative existentials. This paper argues that some major characteristics are not common with other existentials in German and English. In Section 2, based on the discussion by Sweetser (1990) on English existential constructions such as the *there is*-construction, the characteristics of the *es gibt*-construction are given an overview. In Section 3, the definiteness of accusative nominals in the *es gibt*-construction is observed in comparison with the *there is*-construction in English. In addition, for a better understanding of the fundamental principles of how we comprehend existence, German existentials are further examined from the “ontological metaphor” viewpoint proposed by Lakoff and Johnson (1980). Results show that the idea of an “ontological metaphor” is not applicable in the case of the *es gibt*-construction analysis. Furthermore, it is demonstrated that the use of *es gibt* restricts “demonstratives” in terms of adverbials and accusative nominals. By considering Sperber and Wilson’s (1995) “degree of explicitness,” Section 4 discusses that the interpretation of the meaning of *es gibt* largely depends on the contribution of pragmatic inference. Finally, this paper illustrates the semantic and pragmatic features of the *es gibt*-construction.